

認識と労働

JOMONあか데미 ジョウモン 山田 学 C

www.jomaca.join-us.jp

arigatou@image.ocn.ne.jp

2007年2月15日公開（同3月15日註を追加）

序

JOMONあか데미は以下のように客観学から主体学への移行を論理的に提案いたします。

「一 脳の特異性」を確認し「二 脳と認識」の対応関係を理解し「三 言語」の本質を把握します。「四 情念融和」の方法について要点を規定します。「五 生体防御」について確認し「六 血液と労働」の対応関係を理解し「七 貨幣と消費権」について本質的に提案します。「八 健康平和生活」への要点を規定します。健康平和な認識と労働のためにです。

一 脳の特異性

動物と人間において皮膚・感覚器・神経系・脳が進化してきました。

「人間の神経細胞団は、生後細胞分裂をしない特殊な細胞団です。神経細胞は突起（神経線維）をもち、刺激を受けるとその突起を伸し、隣接する神経細胞の突起との間に新たなナからみあい（回路網）をつくります。」¹「²内は文献³の表現をほぼ継承）」

神経線維は興奮していないとき形質膜の膜内に カ（カリウム・イオン K^+ ）が多く膜外に ナ（ナトリウム・イオン Na^+ ）が多いです。興奮すると形質膜の膜内に ナ が増え膜外に カ が増えそれがすなわち電位パルスであり波としてとなりへとなりへ伝ります。

ところで、東洋医学において 陰性 とされている食物は カ が多く含まれ 陽性 とされている食物は ナ が多く含まれていることを桜沢如一氏らが発見しました。

神経系における電気化学的運動も、食物の 陰性 陽性 も、カとナが本質的であり、何らかの連関があると予想されます。カ は炎色反応において紫色であり ナ は黄色であり東洋医学において紫色は 陰性 であり黄色は 陽性 です。

脳は酸素を多く消費し脳における電気化学的運動はブドウ糖代謝以外の代謝により支えられています。

二 脳と認識

人間において神経系と脳の進化という客観的生理的な存在の歴史は、それが

直接に、認識（感覚・表象・概念）の伝統という主体的な存在の歴史です。客観的生理的な存在の歴史は、それが直接に、主体的な存在の歴史です。

客観的生理的な神経系と脳における電気化学的運動は、それが直接に、主体的な認識（感覚・表象・概念）の運動です。客観的生理的な運動は、それが直接に、主体的な運動です。

ここに生理学と認識学を論理的に統一する実体概念の学問用語として 神経的認識 を提案します。

神経学的認識 において、客観的生理的な面（神経系と脳）と主体的な面（感覚・表象・概念）が、直接に対応しています。ふたつの別の面の対応関係です。対立の統一という論理の一種類です。

神経系と脳か、感覚・表象・概念か、客観的生理的な面か、主体的な面か、生理学か、認識学か、あれか、これか、と問いかけていたのでは、問題が解決しません。

あれもこれも、対立の統一という論理、ふたつの別の面の対応関係を認め、神経学的認識 という実体概念を確立することこそが、いわゆる「心脳問題」の解決なのです。ただし、論理実証主義やプラグマティズムの本音は、現実論としての認識学を排除したいようです。それでも現実論としての認識学へ接近したいとする学者の過渡的な用語が、「クオリア」（感覚質）です。

三 言語

個人における認識（感覚・表象・概念）の運動は、言語を中心とする表現という物質的像の運動を媒介として、発達しています。認識は物質的像を媒介として発達しています。

以下において、対象とは、現実のあるいは架空の・体内と世界です。

表現の本質は 対象を認識して表現してある（対象 認識 表現）という客観的な微細歴史的關係です。これを 表現形成過程 と呼びます。表現形成過程 は 対象をその像として認識する（感覚・表象・概念する）認識過程（対象 認識）と 認識をその像として表現する（物質に加工する）表現過程（認識 表現）の統一です。

表現にある 表現内容 とは 表現形成過程 という関係の中にある認識の構造です。表現の本質は 表現形成過程 という関係でありその中に 表現内容 という認識の構造があります。

表現を理解することは理解者が 表現内容 という表現者の認識の構造に同化することです。ただし、表現者と理解者において生活体験ないし記憶のあり方にずれがあれば同化には一定の限界もあります。

言語は特殊な表現であり、音声言語と文字言語とがあります。

言語の本質は 対象を認識し標準概念化して言語規範を介し言語表現してあ

る（対象 認識 標準概念 言語規範 言語）という客観的な微細歴史的関係です。これを 言語形成過程 と呼びます。言語形成過程 は 対象をその像として認識し（感覚・表象・概念し）さらに標準概念化する認識過程（対象 認識 標準概念）と 認識を標準概念化しその像として言語規範を介し言語表現する（物質に加工する）表現過程（認識 標準概念 言語規範 言語）の統一です。認識を標準概念化する過程（認識 標準概念）は 認識過程 の仕上げであるとともに 表現過程 の端緒であり、言語表現者の社会的実践の立場において試行錯誤があります。

言語にある 意味 とは 言語形成過程 という関係の中にある標準概念を中心とした認識の構造です。言語の本質は 言語形成過程 という関係でありその中に 意味 という標準概念を中心とした認識の構造があります。

言語を理解することは理解者が 意味 という言語表現者の標準概念を中心とした認識の構造に同化することです。ただし、言語表現者と理解者において生活体験ないし記憶のあり方ないし言語規範にずれがあれば同化には一定の限界もあります。

コンピュータによる言語処理においては、コンピュータに入れられるであろう個々の文字言語・音声言語にある 意味 を処理するため、あらかじめ言語慣用例・言語型式を論理的に分類して記録します。言語慣用例は句例・節例・文例・文章例であり、言語型式は語彙・句型・節型・文型・文章型です。

コンピュータにおいてあらかじめ記録する言語慣用例・言語型式の論理的な分類は、個々の文字言語・音声言語の本質である 言語形成過程 のうちまず は 表現過程 を次に 認識過程 をひろく社会的に把握しすなわち 言語形成過程 の社会的法則性を把握しつつ行います。

コンピュータにおいてあらかじめ論理的に分類して記録する言語慣用例・言語型式は、意味 処理設計者が想定する社会的標準概念の表現です。なお、概念には語の概念・句の概念・節の概念・文の概念・文章の概念があります。

人間社会における認識と表現は 無自覚主体的な認識と表現があり、客観的な表現関係の反省があり、そして自覚主体的な認識と表現がある（無自覚主体的 客観的 自覚主体的）という 否定の否定 において発達していきます。

人間による認識の相互理解 論に集約される自覚主体認識学のため 総合的な言語・表現・記録・通信・制御の理論 〃 総合通信論 が重要となります。

四 情念融和

世界の物理的進化・生理的進化・認識伝統の中において日本民族ないし諸民族の情念をどのように融和させていくか。

民族学者の川喜田二郎氏がそのための認識と表現の方法を創始しました。川

喜田と二郎のイニシャルをとりKJ法です。(KJ法をめぐる知的所有権に関しては必ず本稿その注をお読みください。)

以下、現実論としての認識学や表現論などの具体化として、KJ法の要点について規定します。ただし、本稿は川喜田二郎氏に事前に見せたものではなく、責任はすべて山田 学にあります。

まず、全体観から入ります。地球表面は一体でありその物理的運動・生理的運動・認識運動には論理的な模様があります。これを 地球面模様 と呼ぶことにします。地域・海域は 地球面模様 の部分なのです。

このあたりの全体観をKJ法の「移動大学」というイベントは「雲と水」というスローガンにより象徴表現したのかもしれませんが。

山田 学はKJ法に学び、日本民族において資本制社会の問題を旧ソ連とは別の根本的な方法により解決しその流れを逆にロシアへ輸出する ぐらいに考えたいです。

KJ法は創造性の発揮のためにあり、現実論としての学問の日本語と日本語などの健康法としての芸術 を中心にわれわれはどう創造性を発揮していくか？ これが問題です。

KJ法は、自分の未知の世界に取材し諸現象からその奥にある構造を把握していくための、事務と思索の技わざです。

ただしKJ法は、身のまわりの手段をしいだいに総合していく日本民族的な創造性を、より継続的かつ大局的にしていけるよう、川喜田二郎氏が編み出した事務と思索の技です。山田の学び方が浅いかもかもしれませんが、どうしても、夏目漱石『草枕』の言う「情に棹させば流される」ところがあります。KJ法のみでなく、現実論としての国家本質論から目的分析する、西欧民族的な目的分析ではない、新しい日本民族的な目的分析の創造性が必須であると、山田は判断するようになりました。もちろん後者のみでは、「智に働けば角が立つ」となります。

とにかく、KJ法による民衆の情念融和の仲介を通し、民衆の個性的特殊的な生活現場(休養と労働の現場)に現実論としての健康生活論を適用する際の諸条件や創意工夫を発見できる。そのように山田は考えます。

情念の良縁を創造できたなつかしくなる集会場所・仕事場所・生活場所を増やしていく。そういう創造的地縁について川喜田二郎氏は「ひろばの創造」「参画社会」と表現したのでしょうか。

これからは、創造的地縁という土台とあわせ、情報のやりとりを通して情念の良縁を創造できたなつかしくなるホームページ画面を増やしていく。そういう創造的通信縁も大切かもしれません。

こういう理想に照し、恥しい限りですが、山田はJOMONあかみサイトをささやかに試行しています。

KJ法はまず、自分の未知の世界に取材するため、記憶と注意と発想と私的記録と公的表現を調和させます。

生活や生産の流れの中において見たり聞いたり想ったり話したりした新鮮な内容を続けて見ながら聞きながら想いながら話しながらあとで正しく想い出せるよう私的記録する。その場において文字言語の主要部分のみや記号や線などを自然に工夫し面的に表現する。川喜田氏はこれを「点メモ」「ラクガキ」と命名し自覚的な訓練こそを奨励しました。上達すると思わぬ威力を発揮します。この上達には後述するKJ法図解の訓練も深く関係しています。感覚器・脳・口・手・文具を自然に連動させる訓練です。鋭い深い注意と発想と記憶の必要に關し、それを阻害する形式的記録ではなくて、むしろそれを促進する内容本位臨時記録です。

公的表現はあとで時間のとれたときにじっくり行います。

そしてKJ法においては、会議法として、「ワイワイガヤガヤ（個人点メモ）沈黙（個人清書）連歌の会（全体簡易図解化）」という認識と表現（音声・文字・図解）のリズムを人体の脈搏の鼓動（pulse）のようになりかえす「パルス討論」という方法も開発しています。

*

自分（たち）に興味がある未知の分野に關し、何だか気にかかることを一枚一項目ずつ文字言語などにより記したKJ元ラベル（紙きれ）を数十枚から数百枚用意します。一枚一項目とはKJ法で「じくわく志」と称するひとつの情念的な意味があるということです。文字言語などの奥にある情念と情念のまとまりのみを手がかりとして未知の分野の諸現象からその奥にある構造を段階的に把握していく。全体構造を把握したら数十枚から数百枚のKJ元ラベルの諸関係を面的に秩序づけて表現する。これがKJ法図解作成過程です。KJ法図解は記号・絵・象徴などを含む総合的な絵画的文章です。民族学者の川喜田二郎氏はこの表現様式を地理学の地図や仏教の曼陀羅まんだらの記憶から発達させたのでしようか。

さて、KJ法図解の作成は、この未知の分野において諸現象を現実論として分類できる本質認識や構造認識が自分（たち）にはまだない、という謙虚な自覚から始ります。とにかく部分と部分の情念のまとまりを発見するように部分と部分の意味のまとまりをいただきたいに発見していこう、という元ラベルから組み上げる認識姿勢に徹します。

まず、「ラベル拡げ」です。用意した元ラベルをたてよこに形式的には読みやすいように整然と並べます。ただし、内容的にはむしろばらばらにしたほうがよいです。部分と部分の關係認識をあえて徹底して渾沌化するためです。

次に、元ラベル全体を並べた順に一枚一枚の「志」と称する情念的な意味を

確認しながらていねいに読解します。対象のすべての部分をあえてばらばらに確認しますから関係認識が渾沌とします。こうして元ラベル全体を三回以上はくりかえしていねいに読解し関係認識が渾沌としたまま全体観を記憶します。

すると渾沌とした関係認識の中にも「このラベルとあのラベルは全体の中において情念的な意味がより近くてまとまるな……」と自然予想されることがいくつも出てきますから、「ラベル集め」の段階に入ります。「あのラベル」を移動させ「このラベル」に半ば重ねて置きます。このような「ラベル集め」をしながら、並べた順に読解することをくりかえします。厳密なKJ法図解においては「ラベル集め」された一セットはラベル二、三枚とします。いくら全体をくりかえし読解しても「ラベル集め」の自然予想がされない「一匹狼」のラベルが全体の三分の一前後はのこります。

次に、「ラベル集め」された二、三枚のラベルをクリップか輪ゴムで束ねます。「一匹狼」ラベルには「一匹狼」であることを示す特定色の点などをラベルのすみに入れます。「情念的な意味がまとまるな……」と自然予想された一セット一セットについて、まとまった意味を文字言語表現して新しい一枚の「志」「ひとつの情念的な意味のあるラベルをつくる」ことが「表札づくり」の段階です。「表札」をつくり一セット一セットの上に重ねて束ねていきます。元ラベルと「表札」という段階のちがいを区別するため「表札」は元ラベルと異なる色で書きます。

「表札づくり」においては「情念的な意味がまとまるな……」と自然予想された内容を新しい「志」「ひとつの情念的な意味のある文字言語表現として公的表現するよう認識と表現の苦勞をします。その過程においてはまず内容の主要部分を「点メモ」(私的記録)しつつ元ラベルの内容を過不足なく「表札」に反映できるよう元ラベルをさらに正しく読解し「表札」というひとつの公的表現に盛り込みます。それぞれ短歌の長さの二、三枚のラベルの内容を「表札」という一枚の短歌の長さのラベルにまとめて正しく反映する認識と表現の訓練です。認識を標準概念化して言語規範を介し言語表現する過程を深く体験できます。日本語なら日本語的な語句節文文章の創造過程を深く体験できます。

こうしてすべてのセットに「表札」をつけそれらの束と「一匹狼」を同格に扱い次の段階の「元ラベル」とみなして以上の工程をくりかえします。まとまると自然予想される内容に「表札」をつけそれとのこりの「一匹狼」を同格に扱いラベル束の数を段階的に減していきます。ラベル束が数束になったところで「ラベル拡げ」「ラベル集め」「表札づくり」というサイクルを終えます。

*

最終の数束間の関係を認識しその関係認識をまずは数束を面的に配置するこ

とにより表現します。「空間配置」と称する抽象絵画的表現です。次に束と束の関係認識を矢印その他記号を自由に工夫して表現します。これを「関係線」と称しています。さらに関係認識を具体的に文字言語表現し「関係線」に添えます。これを「添えことば」と称しています。(数十枚から数百枚の元ラベルの)全体構造を面的配置 記号 文字言語と情念が自然に表現される順に表現し関係認識を秩序づけます。なお、以上の全体構造表現はあとで模造紙などに大書しますが、まずは別紙にメモしておきます。

模造紙などに最終の数束を面的に配置します。輪ゴムなどをはずし一段階だけ中味の束をとり出しその段階の束と束の関係を全体構造をもにらみつ認識し面的に配置して表現します。以下、はじめの元ラベルの段階に達するまで「空間配置」＝関係認識の面的配置表現をくりかえします。(元ラベル数が多い場合はインデックス図解と細部図解に分けます。)

KJ法図解が公的表現として見やすいように元ラベルの位置を細かくきめて元ラベルのみをすべて模造紙などに貼ります。これが「ラベル集め」された一セットであると示す線でその元ラベル群を丸く囲みます。これを「島どり」と称しています。この線は「ラベル集め」の段階を区別し線種・太さ・色などを変化させます。情念的な意味のまとまりを段階的に表現する記号です。「表札」を「島どり」線の上方に添えて書き写します。「表札」の文字も太さ・大きさ・色などを段階的に変化させます。太さ・大きさ・色などが段階を表現する記号です。(一段目の「表札」はラベルのまま「島どり」線の上に貼ることも多いです。)

先の全体構造表現の「関係線」という記号や「添えことば」という文字言語を模造紙などに大書します。必要ならばより低い段階についても「関係線」「添えことば」を入れ秩序ある構造認識を表現します。

KJ法図解という公的表現が一目において情念的に訴えるよう最高段階の数個の「島」についてそれぞれの「島」全体の内容をごく短い文字言語・絵・記号などにより象徴する表現、それを真剣に考案しそれぞれの「島」全体に重ねて大書します。この象徴表現を「シンボルマーク」と称します。情念のままに主要内容をごく短く自由表現する認識と表現の姿勢はすでに「点メモ」からある姿勢であるかもしれせん。

最後に図解全体の表題を大書し、図解の一隅に(1)図解作成の(2)同じく(3)元ラベルデータの(4)出所(4)図解の(作成者などの)註記を入れます。これらの註記は一般に、情報の信頼性を示すためにも有益です。

*

KJ法図解の内容を音声言語表現(口頭発表)したり文字言語表現(文章化)したりします。訓練により「ラベル集め」「表札づくり」「空間配置」「関係線」「添えことば」「シンボルマーク」という認識と表現が情念のままに自然に行

えるようになっていけば図解内容の音声言語表現や文字言語表現は流れるように自然に行えます。図解内容の言語表現の過程において新しい発想が生れることも多いです。

川喜田二郎氏は情念の良縁を追求し悪縁を回避する姿勢を、認識と表現の細かい技として具体化したのであり、学問・生産・道徳・政治の現実論と上手に組みあわせれば日本民族ないし諸民族の情念融和に深く貢献すると山田は判断しています。

以上がJOMONあかでのみとしてのKJ法の要点の規定です。KJ法について正式には文献7と8や『川喜田二郎著作集』を学んでください。

余談ですが、山田はKJ法図解の「ラベル集め」のたいへん粗い応用として本一冊を一枚のラベルとみなし何かを執筆するために参考著作として「まとまるな…」と自然予想される本10〜30冊を一セットとし横に積み重ねて部屋のあちらこちらに置いていきます。良い意味の積ん読です。

五 生体防御

人間の生体防御系（免疫系はそのもつとも進化した一部分）は異物・病的細菌・ウイルス・毒素などの侵入を排除し、体内の老廃細胞・老廃物やガン細胞などを処理しています。

生体防御系に関与しているのは毛・皮膚・粘膜・涙・鼻汁・唾液・皮脂・汗・胃酸・腸内健康細菌・体液内活性物質・好中球・マクロファージ・リンパ球などです。

また、ホルモンや神経系が関与する本能的な背伸び・あくび・うなり・くしやみ・下痢・食欲不振などもあります。

人間は全身の皮膚・感覚器を通して世界感覚（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）しています。全身の体液・皮膚を通して一定の排泄（排毒）をしています。とくに足の裏・手のひら・舌・鼻の穴・耳全体・眼・頭皮が重要です。

また、血液を中心とする体液についてそのホルモン濃度などを体内感覚しています。

以上を踏えつつ自覚的な生体防御は 自分自身が個性的に必要な栄養と教養と精神安定 を追求し続けることでしょうか。その究極は 記憶と念を快適にする ことでしょうか。

社会的には 生体防御としての学問と芸術や武道 という概念も成立するでしょうか。人間の思考・情念・情感・生体においてとくに情念の良縁を追求し悪縁を回避することは、それが直接に、健康な酵素活性という生理に関与しているのかも知れません。

なお、山田 学が父・山田俊郎から継承した「TQ技術」は人間の血液を中心とする体液についてその健康な酵素活性に関与していると推理しています。

六 血液と労働

人間において血液の進化という客観的生理的な存在の歴史は、それが直接に、労働と休養の伝統という主体的な存在の歴史です。客観的生理的な存在の歴史は、それが直接に、主体的な存在の歴史です。

客観的生理的な血液の運動は、それが直接に、主体的な労働と休養の運動です。客観的生理的な運動は、それが直接に、主体的な運動です。

ここに生理学と認識学を論理的に統一する流動的実体概念の学問用語として血液的労働 を提案します。

血液的労働 において、客観的生理的な面（血液）と主体的な面（労働と休養）が、直接に対応しています。ふたつの別の面の対応関係です。対立の統一という論理の一種類です。

七 貨幣と消費権

個人における労働と休養の運動は、貨幣（現金・預金）と商品の運動を媒介として、発達しています。労働は貨幣を媒介として発達しています。

以下において、対象とは、人々の生活ないし自然です。生産の本質は労働により対象を調整することです。

健康にであれ病的にであれ、人々の生活を生産する（労働により人々の生活を調整する）までには、そのために必要な商品を生産する社会的連鎖があります。その社会的連鎖は食物・原料・エネルギーという商品を生産する（労働により自然を調整する）ことに帰着します。こういう社会的連鎖は客観的な微細歴史的關係です。これを 生産累積過程 と呼びます。

生産物は労働により自然を調整したものです。

生産物にある 価値 とは 生産累積過程 という関係の中にある労働の構造です。

生産物を消費することは消費者が 価値 という生産者の労働の構造を受け継ぐことです。ただし、人々への 健康平和教育と保健 を結果する受け継ぎもあれば、人々への 病的戦争教育と保健統制 を結果する受け継ぎもあります。

サービス（人々の生活の生産）や生産物は商品として販売され貨幣（現金・預金）と交換されます。ただし、貨幣が商品の生産に要した労働量を正しく反映している場合もあれば、正しく反映していない場合もあります。

個人における休養は生活手段を媒介とした労働力の自己生産でもあります。その労働力は商品として販売され貨幣（現金・預金）と交換されます。

貨幣が労働力という商品の生産に要した労働量 W を正しく反映していたとしても、生産においてその労働力が可能な労働量は一般に W より多く $W + w$ なの

です。

市場競争の本質は労働力から剰余労働量 w を搾取する競争です。国民国家の労働法は結果的にそれを公認しています。

人々への健康平和教育と保健を結果する労働構造の社会的な受け継ぎを発達させつつ、健康平和教育と保健に対する購入費用（消費権）を富裕階級から貧困階級へ寄付する。このように、社会的な搾取に寄付を調和させる階級循環、すなわち寄付込市場制度をJOMONあか데미は提案いたします。

八 健康平和生活

健康平和生活を主体的に創造するには以下の6つの認識を健康平和化することが大切です。

姿勢動作の認識

呼吸の認識

食事と排泄の認識

（異性関係を土台とする）人間関係の認識

精神の反省

生活環境の認識

JOMONあか데미の祈りと誓いは人々（おたがい）の健康平和生活を結果する社会的な労働交換と情念融和です。

〔文献〕本稿執筆直前に以下の文献を復習しました。

- 1 時実利彦『脳の話』（岩波新書 1962年）
 - 2 時実利彦『人間であること』（岩波新書 1970年）
 - 3 薄井坦子『看護のための人間論ナースが視る人体』（講談社 1987年）
 - 4 桜沢如一『東洋医学の哲学』（日本C.I.協会 1973年）
 - 5 三浦つとむ『言語学と記号学』（勁草書房 1977年）
 - 6 渡辺力蔵『日本的創造性・創造性のマクロ理論』（近代文芸社 2000年）
 - 7 川喜田二郎『創造と伝統 - 人間の深奥と民主主義の根元を探る』（祥伝社 1993年）
 - 8 川喜田二郎『KJ法 - 渾沌をして語らしめる』（中央公論社 1986年）
 - 9 野本亀久雄『生体防衛力』（ダイヤモンド社 2003年）
- 〔KJ法をめぐる知的所有権に関する註〕KJ法はKJ法本部・川喜田研究所（東京都目黒区碑文谷9-14-6）の登録商標です。これのみでなくKJ法本部・川喜田研究所はKJ法をめぐる著作権・商標権を厳格に管理しておられます。/JOMONあか데미はKJ法について論じることはあっても解説したり指導したりすることはありません。本稿も解説や指導の意図はありません。/KJ法を学びたい方は必ず川喜田二郎先生の著作に学んでください。研修および知的所有権に関してはKJ法本部・川喜田研究所の指示に従ってください。

論理

実践的な数学はヘーゲル論理

原理的 発展か

新しいものを

公理主義で不安定なら理論仏教でいけると考えていてよいであろうか。

論理的なKJ法に公理主義がふつからと体系が不安定に陥るであろう。

公理主義は、公理という仮説にとらわれるから、体系が安定しない。

KJ法は科学以前であるから、数学やシステム論は、証明できない。

理論仏教で近代科学のパラダイムが超えられるだろうか。

人

意外と

実践的な論理は片面的な真理に固

実践しな
なら、「無限
が……」

「アリストとピタゴラスは、
「追いつかない、追いつかない」
という真理に執着している。」

「無限小数は、計測精度
を考えない、実践しない理論
である。」

現在のソ連や中国などの
弁証法では、近代数学を
超えられない。

質の量に対する優位、無限と有限の調和など、ヘーゲル

無限は
相対的

ヘーゲル論理学は、質の
量に対する優位を説いた。

有限はそのまま、無限
側面である。

(公的表現) 山田が1985年に日本創造学会の発表に用いたKJ法図解から